

小林城

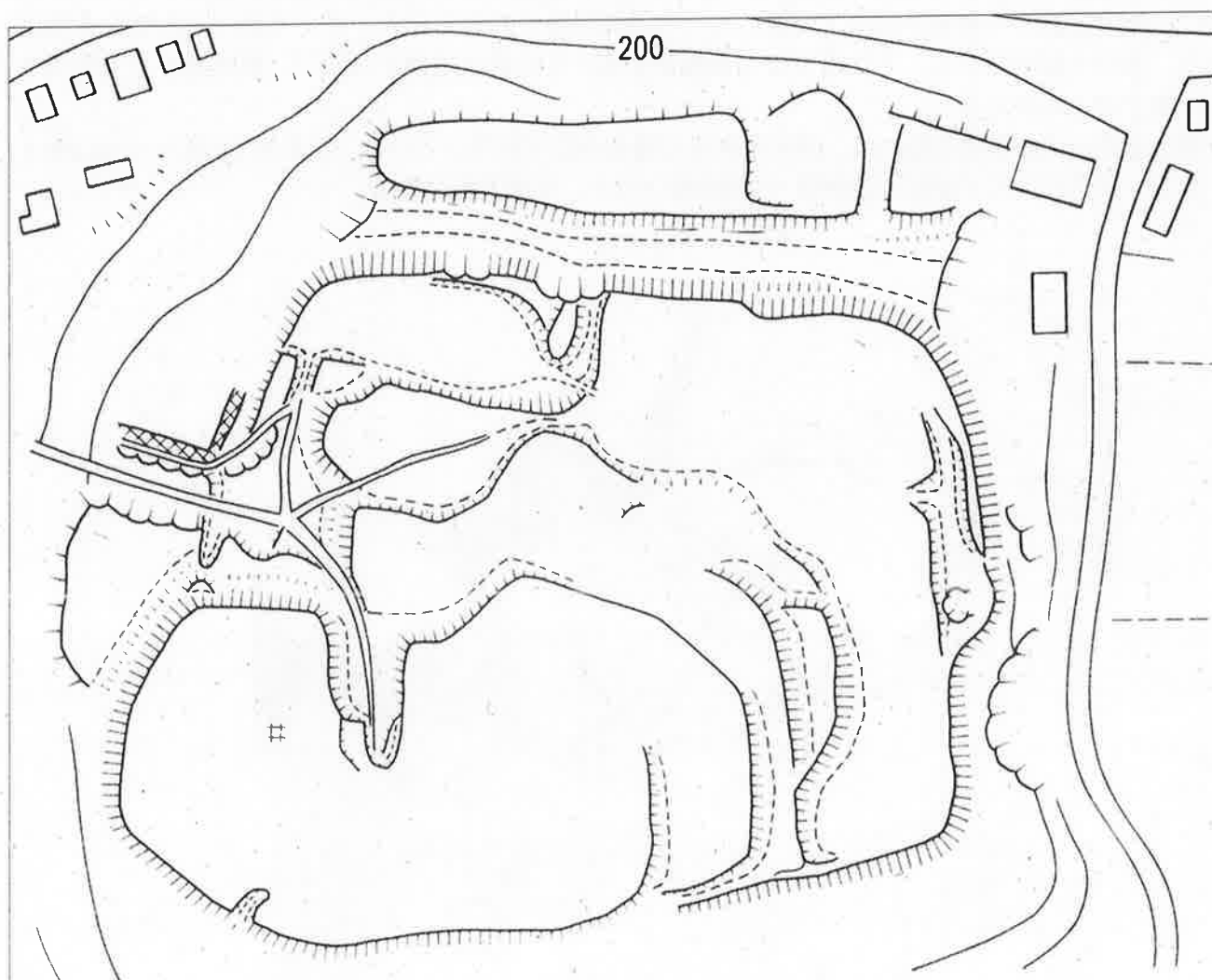
所在地：小林市真方字下ノ馬場 803 番地 5

発掘調査歴：なし

小林城は伊東 48 城の一つ、小林市真方字下ノ馬場、城山と呼ばれる標高 223m の丘に築かれたものである。丘の西・北・東の三方に石氷川が流れて自然の外堀、東方・南方は絶壁で天然の要害となっている。山上に本丸、西方に二の丸・三の丸の跡があり、そのほかに曲輪や空堀の跡もある。

永禄 7 年（1564）島津領主第 15 代島津貴久は二男義弘を飯野城へ置いた。永禄 9 年（1566）伊東義祐は三ツ山に塁（小林城）を築き、須木領主米良筑後守を首将として飯野城攻撃を計るが、逆に島津軍はこの城を先制攻撃。貴久の長男義久が首将となり、二男義弘は水ノ手から、三男歳久は大手口から攻めたが落城せず、飯野に退去した。

その後、天正 4 年（1576）に島津氏が高原城を攻略し落城した。小林城も戦いを交えることなく降って島津氏の領有するところとなるが、元和元年（1615）の一国一城令によって廃城となる。ただし家臣団の集落は残存し、地頭仮屋跡に標柱が建立されているほか、上ノ馬場・下ノ馬場・向江馬場等、麓集落の地名が残っている。



小林城縄張り図（北郷泰道氏原図作成）

野尻城

所在地：本城 小林市野尻町東麓字本城原 4157 番地 1

新城 小林市野尻町東麓字野首 3691 番地

発掘調査歴：2001『本城原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター

野尻町市街地の南方の台地上に立地する。北～東方には城之下川と呼ばれる小河川が流れる。南北 400m、東西 800m に及ぶ、広大な城域を有する城郭で、「本城」と称される部分と「新城」と称される部分より成る。「本城」部分は図の南東側範囲外にあたる。

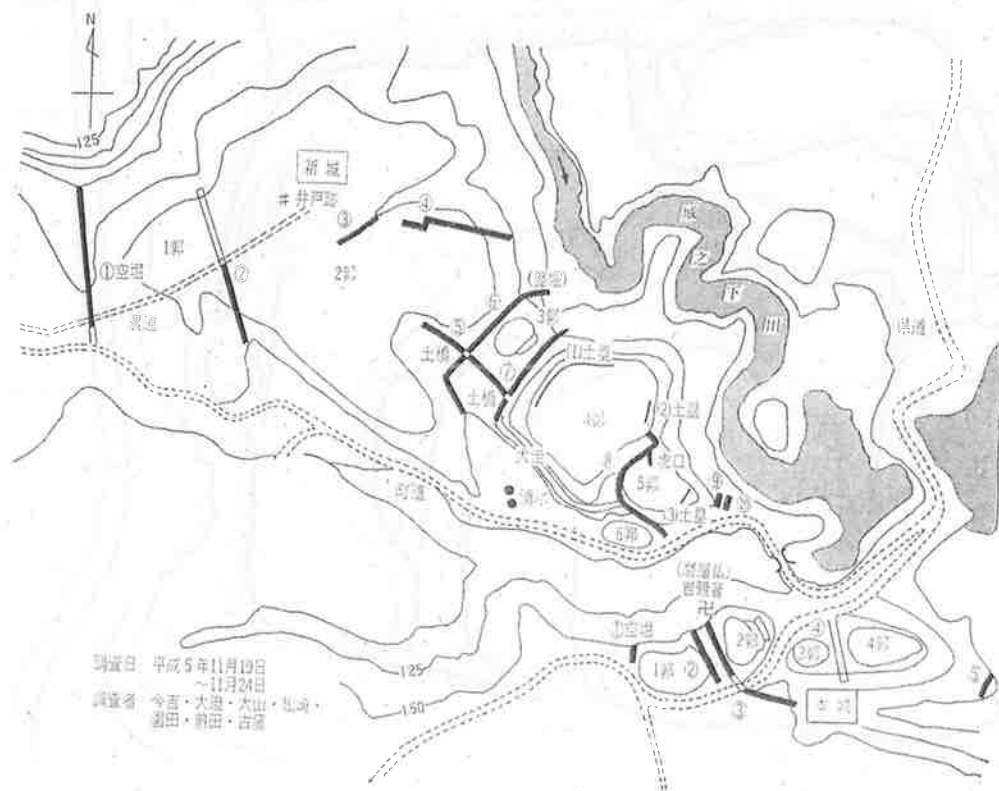
南側の「本城」部分は中心を県道が貫いており、東側を中心に破壊が進んでいる。東端部に大きな空堀があり、往来を遮断している。また主たる 2 つの曲輪の間にも大きな空堀が見られ、その北方には岩観音とよばれる磨崖仏がある。

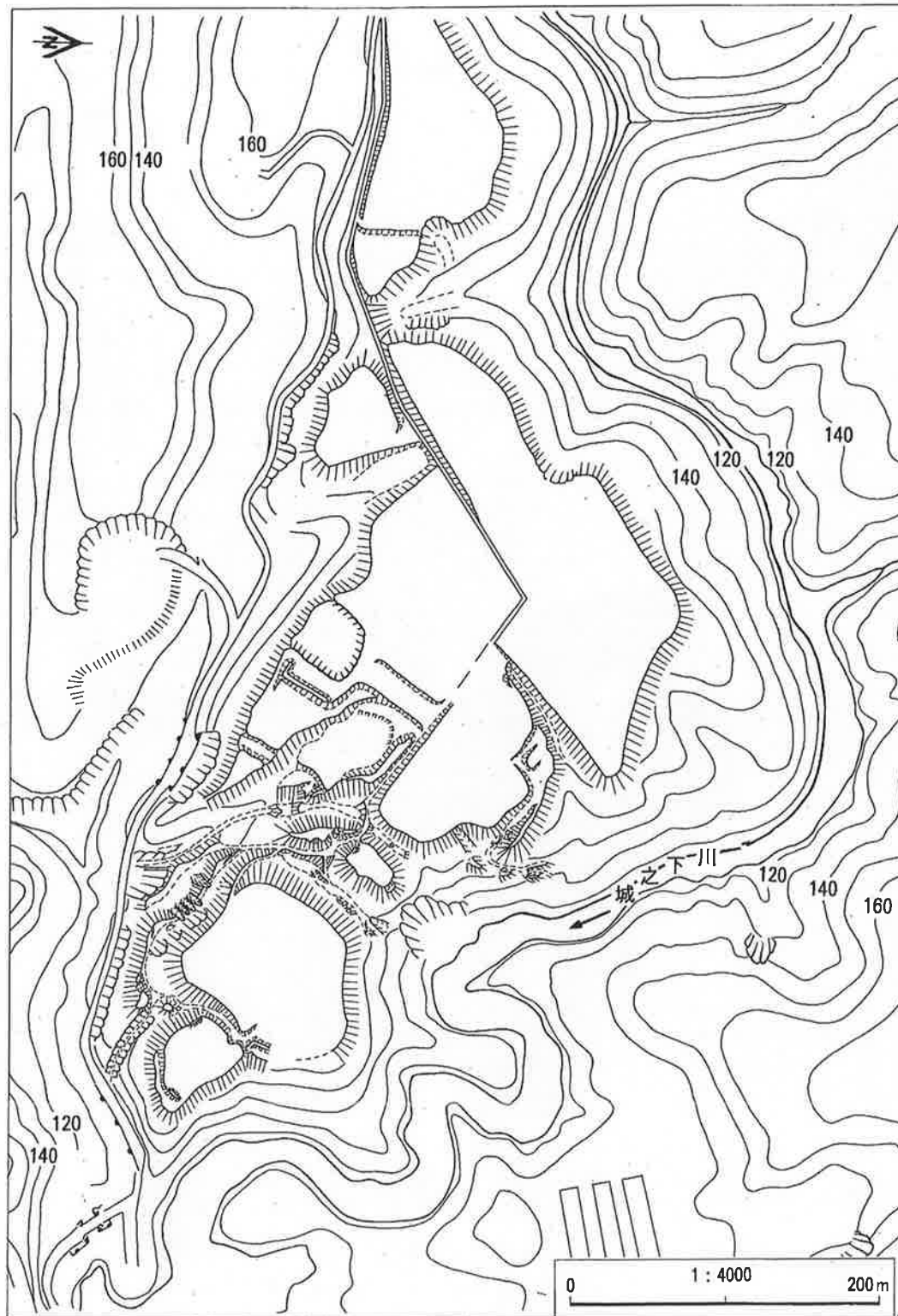
北から西側にかけての「新城」部分は、そのさらに西側が一連の台地地形となるため、空堀を設定して防御を固めている。最も北西の側には広い平坦地があり『日向地誌』などは「本丸」と記しているが、むしろ居館的な機能を有する場所であったと考えられる。標高は 167m。その曲輪の中には井戸の跡がある。

中心に位置する曲輪は前述の箇所南東側にあり、北西および東側には土塁が現存している。周囲には腰曲輪状の平坦地が巡る。南側の小さな曲輪は櫓台的なものか。その東側にも大きな曲輪があり、虎口も認められる。それら中心の曲輪群を画する空堀は規模が大きく、堀底道として利用された様子がうかがえる。

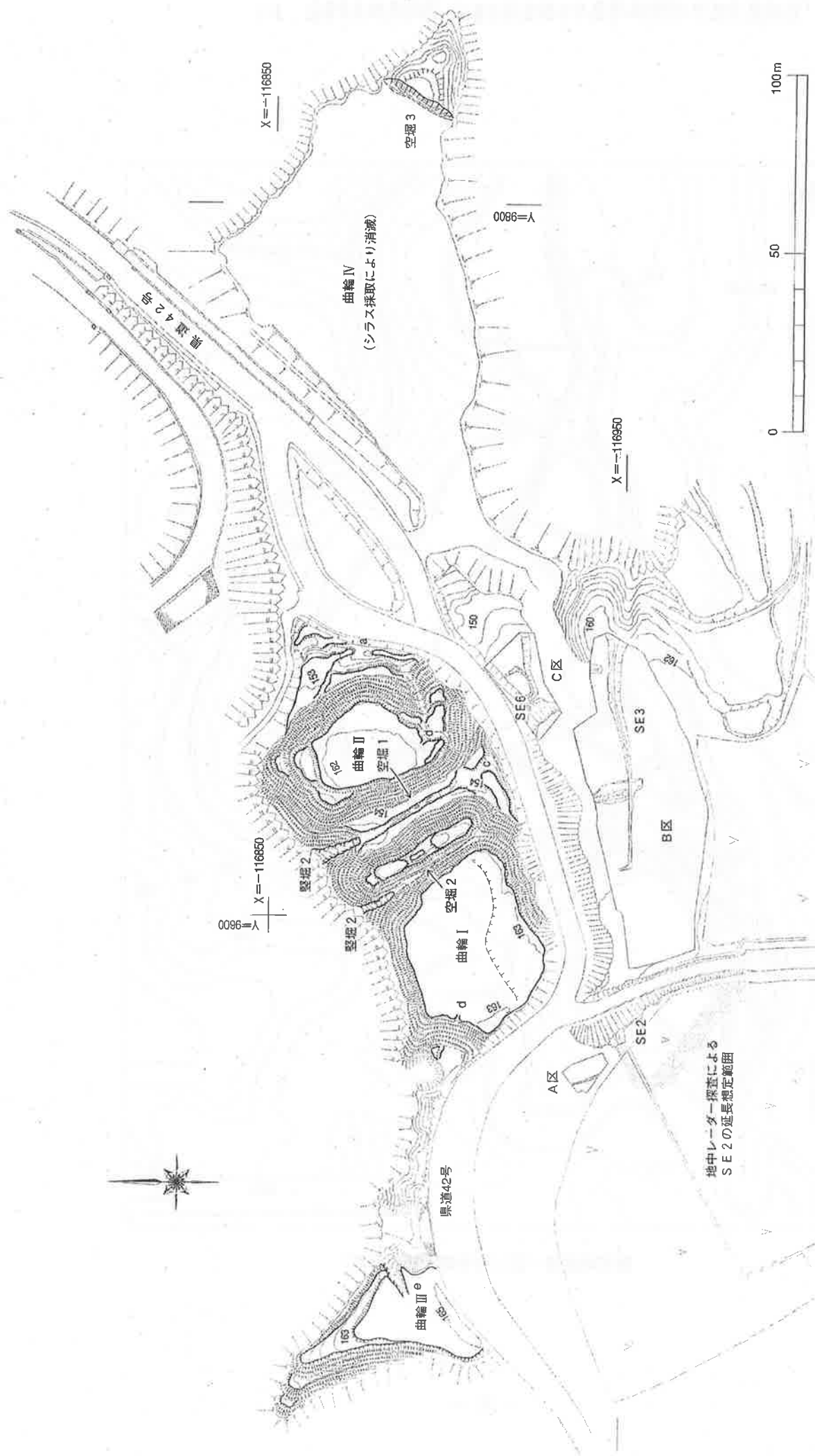
当城は永禄～天正年間初頭には、伊東氏家臣の福永丹波守が守っていた。伊東氏 48 塁の一つに数えられる。近世に入ると野尻は薩摩藩の外城(郷)となり、地頭が配された。

野尻城 縄張り図





野尻城縄張り図（大学康宏原図作成）



第25図 野尻城 (本城) 縄張り図ならびに周辺地形図 (1/1000)

小林の戦国時代（時系列概略）

※内容、戦の兵の数等には諸説あります。

1541 年 天文 10 年

北原祐兼、細野三ツ山城に居城。

1560 年 永禄 3 年

北原兼守、細野三ツ山城で死す。伊東義祐は北原氏の馬関田右衛門佐を後継者に立て、未亡人となった娘（義祐の二女）を再嫁させて三ツ山城におき、急速に勢力を拡大した。

1564 年 永禄 7 年（伊東氏による真幸院攻略）

小林は当時、真幸院に属しており、北原氏の領土であった。伊東氏 10 代当主伊東義祐は、長きに渡り姻戚関係を続けていた北原氏の家督継承問題に介入し、その挙句に永禄 5 年（1562 年）には北原氏の領土のすべてを奪い取るが、島津貴久と相良義陽、北郷時久が北原氏の旧領回復に協力したため奪い返される。しかし義祐は、永禄 7 年（1564 年）に北原氏に従属する大河平氏の今城を攻めとり、また北原氏は離反者が相次いだために、真幸院の飯野地区（えびの市）以外は再び伊東氏の領地となる。

1566 年 永禄 9 年（小林城攻防戦）

小林城は永禄 9 年に伊東義祐が、島津側の飯野城攻撃への前線基地として、須木城主米良重方に命じて造らせたとされる。同じく永禄 9 年に島津義久・義弘・歳久が完成間もない小林城へ 2 万の兵を動員して攻めてきたとされる。島津軍は城を取り囲み、二の丸まで攻め入りながらも須木城からの援軍が稲荷山に陣を張って、城兵と共に島津軍を挟撃し、戦況は地の利を得た伊東軍に有利で、堅固な小林城はなかなか落ちなかった。遂には、義弘も重傷を負ったので島津軍は攻撃を諦め、飯野城に引き揚げることとなった。

1568 年 永禄 11 年（伊東 48 城）

伊東氏と島津氏は以前より争っていたが、文明 16 年（1484）以来、永禄 11 年（1568）まで 9 回にわたる飢肥の争奪戦の末、飢肥南郷が伊東氏の領有となり、世にいう「伊東 48 城」の最大版図ができた。

1572 年 元亀 3 年（木崎原合戦）

えびの市木崎原において伊東義祐と島津義弘の間でおこなわれた合戦である。伊東軍 3000 に対し、島津軍 300 であったが、島津義弘の采配の前に伊東軍が大敗を喫した歴史的な合戦である。この戦いにより伊東軍は伊東祐安、伊東新次郎ら 5 人の大将を含めて米良重方などの幹部級の主力を失い、これが結果的に伊東氏の衰退と内部崩壊（いわゆる伊東崩れ）につながったと考えられる。

1576 年 天正 4 年（高原城の陥落）

木崎原合戦で敗れたものの依然、小林より東は伊東氏の勢力下にあり、伊東義祐は伊東勘解由を高原城に配置し、防備を強化し島津氏に備えた。1566 年の小林城攻防戦の教訓から島津氏は攻略対象を高原城に定め、島津義久を総大将に、北郷氏と呼応して、高原城に迫った。三日間にわたる戦闘の末、高原城は陥落する。この高原城落城により小林城と須木城を治める米良重矩は義祐への遺恨もあって城を明け渡し、後難を恐れた近隣の内木場・岩牟礼・野首・奈佐木などの城が投降した。

1577 年 天正 5 年（野尻三城の降伏）

高原城を失った伊東氏は野尻・戸崎の 2 城の防備を厳重にして島津氏に対していたが、島津方である高原城主上原尚近の策謀により、野尻城主福永丹波守は島津氏と内通し、島津義弘を野尻城内へ引き入れた。つづいて戸崎城も島津氏の手落ち、紙屋城主米良越後守も降伏し、伊東義祐は佐土原城までの撤退を余儀なくされた。

○伊東氏の凋落と島津氏の勢い

義祐の周囲には離反した配下が満ちており、諸城の軍兵が逃げ去って収拾がつかなくなった義祐は、姻戚関係のある豊後の大友宗麟を頼って、豊後落ちを決した。こうして西都市の都於郡城が島津氏の手落ち、西諸を主舞台として続いた伊東・島津の抗争に決着がつくこととなった。

1578 年 天正 6 年（耳川の戦い）

九州統一を志していた大友宗麟は、島津氏が伊東旧領を占拠したのをみて、大軍をもって日向国境を越え、大友軍 6 万、島津軍 4 万の両軍は高城川原にて大激戦を展開した。この争覇戦は島津軍の勝利に終わり、島津氏は九州随一の勢力となった。

1587 年 天正 15 年（秀吉の九州征討）

信長の後継者の地位を確立した豊臣秀吉が、37 か国の兵およそ 25 万をもって九州に進撃した。弟の羽柴秀長を日向路の大將として 15 万の大軍が南下し、上方軍に威圧された島津義久は和議を申し入れ、ここに九州の戦国時代に終止符がうたれた。

※秀長軍が南下した際、陣を構えた場所が野尻町東麓^{じんぼる}字陣原としていまも残っている。

これらの戦いに伊集院忠棟は島津氏の重臣として名を連ねており、島津降伏の際には、島津義久の身代わりとして人質となった。人質となった忠棟は、秀長の側近として仕え、石田三成とも親交を持ち、秀吉の厚遇を得るようになった。鹿屋二万石から都城八万石の領主となり、忠棟は京の伏見に都城は息子の伊集院源次郎忠真が城主であった。勢力を伸ばしたことにより島津忠恒より野心ありとされ、京都伏見で父忠棟は殺害され、父の死を知った忠真は都城で兵を挙げ、島津氏に反旗を翻した。

1599 年 慶長 4 年（庄内の乱）

父の死を知らされた伊集院忠真は、都城で兵を挙げ、主家である島津氏に反旗を翻した。いわゆる庄内の乱である。都城盆地の各地でし烈な戦いが繰り広げられたが、忠真は次第に形勢が悪くなり、徳川家康の仲介もあって慶長 5 年 3 月に降伏した。忠真は主家に罪を謝し、許されて薩摩国額娃一万石を給された。

1602 年 慶長 7 年（伊集院忠真の最後）

庄内の乱後、一度は許された忠真であったが、島津忠恒は、いまだ謀叛の疑いがあると考えていた。そこで上洛の際、伊集院忠真を随行させ、途中滞在した野尻で鹿狩りを行ない、部下に密命を下し忠真を暗殺した。その後、暗殺関係者共々供養塔が建立され、今日に至る。

1615 年 元和元年（一国一城令）

一国一城令により三ツ山城、小林城、野尻城、須木城など廃城。小林真方、野尻東麓、須木麓に地頭仮屋が置かれる。

三山城

所在地：小林市細野字水落

発掘調査歴：なし

三山城址は小林市中心部より南西方向 1 km の地点に位置する。

宝光院（現在の専寿寺）の後山で、城の西北を辻ノ堂川が流れて自然の堀となり、東は空堀、中央の最も高いところが本丸跡と思われ、東丸と南出丸との間にも空堀が掘られてあった。

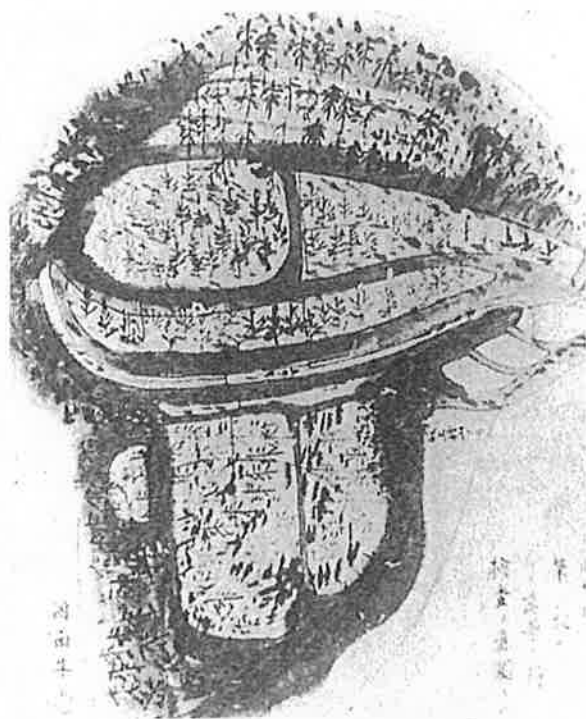
平安時代の末期、宝光院の住職吉富氏が比叡山延暦寺の明雲僧正を迎えるために築城したともいわれる小林最古の城であり、別名を吉富城という。

古くは真幸院の院司日下部氏の管理下にあったが、のち北原氏の城となり、13 代北原兼守は永禄 4 年（1561）この三山城で没したとされて

いる（異説もある）。一時期伊東氏の領有に帰すが、天正 4 年（1576）島津氏の城となった。

永禄 9 年（1566）に伊東氏によって小林城（真方）が築城されるまで小林の中心として栄え、中世期小林が三ツ山と呼ばれたのは、この城の名に由来するという。

元和元年（1615）の一国一城令により廃城となったのち、江戸時代は衆力山（地元民が力を合わせて育てる山）として許可され、明治中期以降は住民の畑地として分割払下げが行われた。終戦後は公私の住宅団地となっている。



三ツ山城跡見取り図（平部嶺南）写（小林市立図書館蔵）

須木城

所在地：小林市須木下田字唐池

発掘調査歴：なし

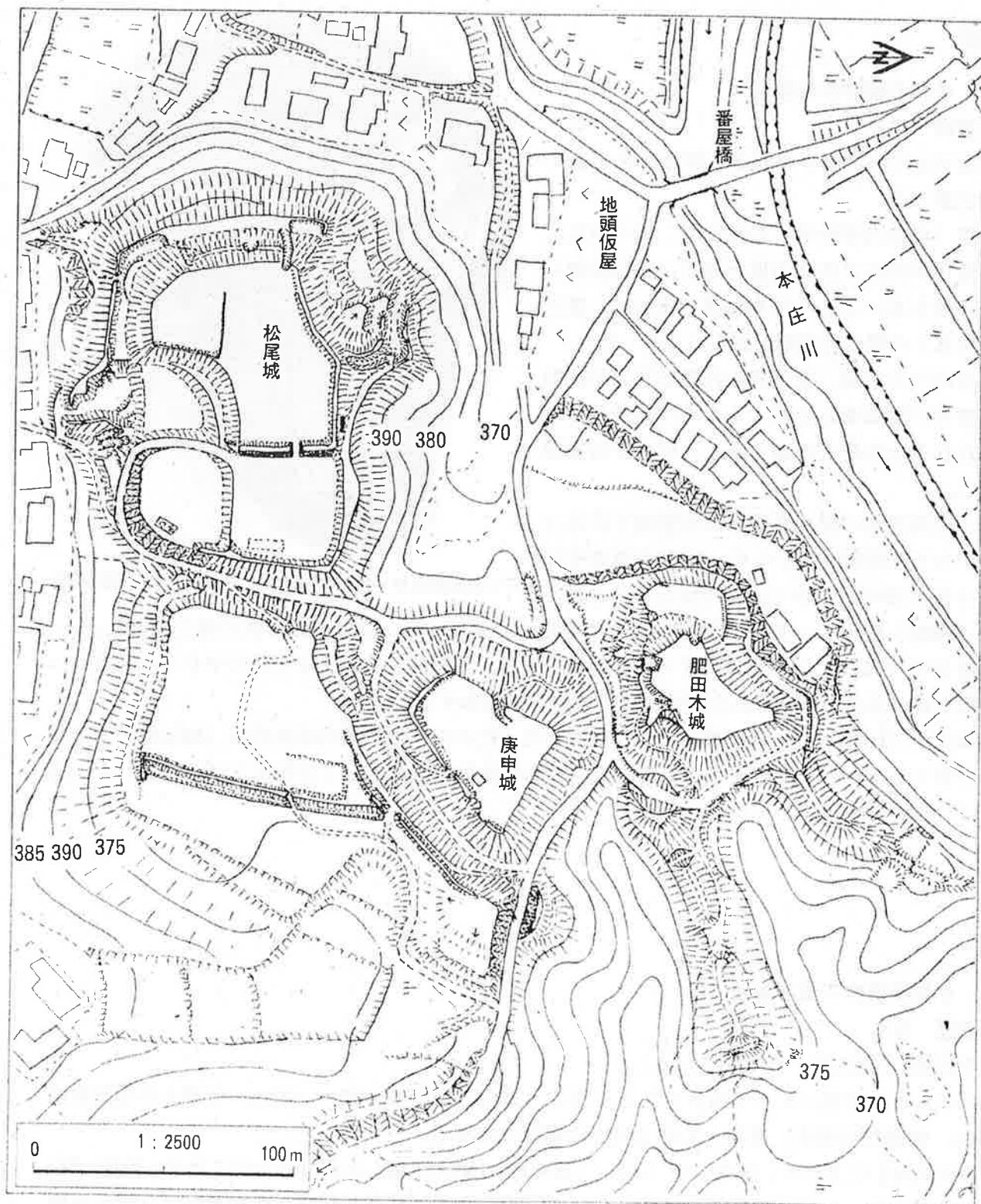
「松尾城」「鶴丸城」とも称される。

規模の大きな空堀によって独立した 3 区画より成る。標高は 400～408m、低地との比高差は約 40m、曲輪群は南北、東西とも約 260m の範囲に広がる。

『日向地誌』によれば、南西より「本丸」「庚申城」「肥田木城」と名付けられており、現在、「松尾城」は「本丸」を指す呼称として用いられている。縄張り調査を行った八巻孝夫は、最も面積が広く、一部石垣が見られる「松尾城」は居住地としての曲輪、北端の「肥田木城」は高さや防御の厳重さから詰め曲輪であったと想定している。

「肥田木城」の西側の平坦地は地頭仮屋と呼ばれ、近世の会所が置かれていた。

伊東氏家臣の米良氏の居城で、伊東氏 48 塁の一つ。永禄年間の城主として米良長門守の名が挙がっている。木崎原合戦後は、島津氏領となり、いったんは伊東氏が回復するが天正 4（1576）年に高原城陥落以後は島津氏領となり、近世には鹿児島藩の外城となった。



須木城縄張り図（八巻孝夫原図作成）

奈佐木城

所在地：小林市須木奈佐木字上奈佐木

発掘調査歴：2011『二原遺跡1区・2区、宮地遺跡1区、宮地遺跡2区、奈佐木城跡』

小林市文化財調査報告書第6集 小林市教育委員会

奈佐木城跡は小林市の北部、岩瀬川に注ぐ谷ノ木川左岸の丘陵上に所在する。城下を東西に走る県道奈佐木高岡線は、須木と紙屋。高岡を結ぶ交通路であり、この道路によって通じる南東の紙屋城跡までは約14km、北東の須木城までは約4kmである。奈佐木城を含むこの3城は戦国時代伊東氏が配置した所謂「伊東四十八城」に数えられており、一時期は日向の大半を支配した伊東氏にとり小林城などと共に、真幸口経略の拠点となった。

標高424mの頂部に主郭があり、その北側および南側にのびる尾根に堀切や土塁を設けて往来を断っている。特に南側は尾根が続くため、その方向に防御の主眼を置いていたことが読みとれる。

【発掘調査概要】

原因：奈佐木城址公園整備事業に伴う発掘調査

遺構：曲輪、古神社跡

遺物：在地系土器、国産陶磁器、中国陶磁器、青銅製品、銭貨

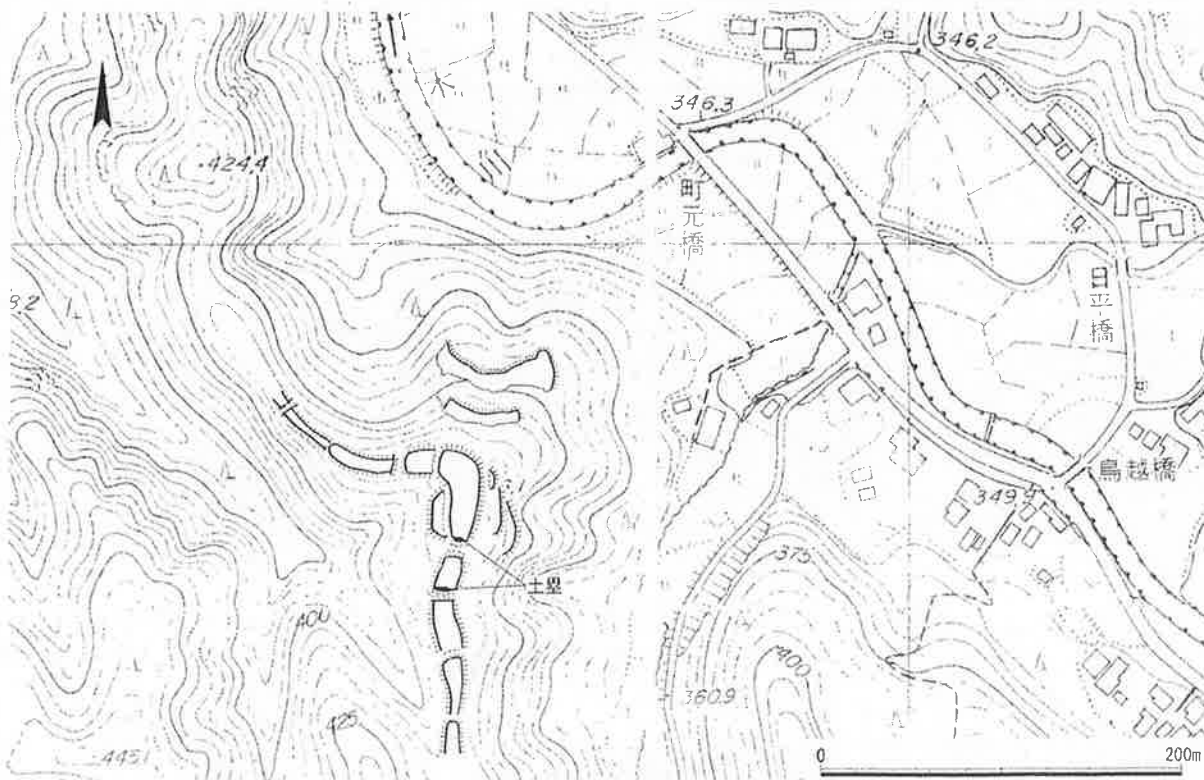


図4-8 奈佐木城縄張り図 (1/4000：宮崎県 1999 作図を基に加筆及び製図)

戸崎城

所在地：小林市野尻町東麓字出口 1426 番地 1

発掘調査歴：2015『戸崎城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 235 集

戸崎城址は国道 268 号野尻町中心部から、約 1km 東方の台地上に位置している。東・南・北の三方を深い谷に囲まれ、戸崎川が巡り、その間を縫うように隘路が西方の野尻原に通じる要害の地であった。

永禄のころ、この城も伊東 48 城の一つで、絶えず野尻城と連携を保っていた。元龜 3 年(1572)木崎原の戦いで城主肥田木四郎左衛門が戦死した後は、漆野豊前守が首将であった。天正 5 年(1577)12 月 7 日に野尻城が、その翌日に戸崎城が島津勢によって攻略され落城している。その後、元和元年(1615)徳川幕府の発した一国一城令で破却された。空堀や土塁によって堅固に守られている縄張りの概要から、この城が伊東 48 城の一つとして、西方に対する防備に配慮していたことがうかがわれる。

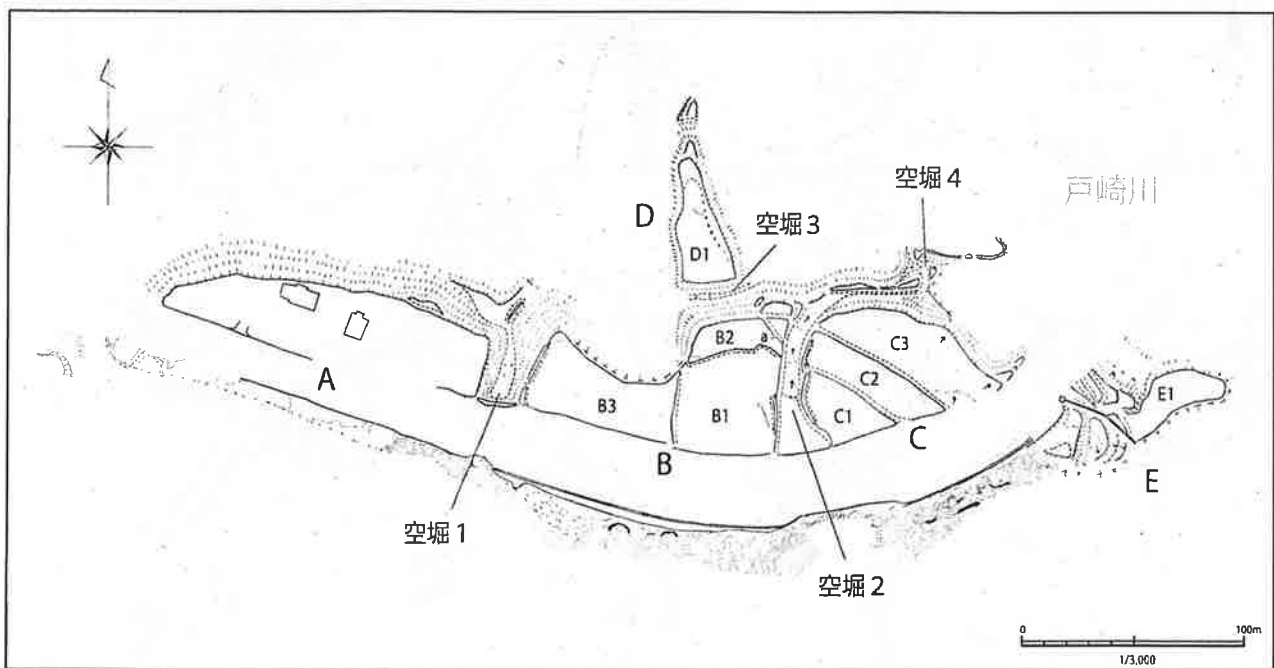
現在は国道 268 号バイパスの開通によって城址南部の一部が掘削され、東端には野尻大橋が架けられている。

【発掘調査概要】

原因：国道 268 号線道路拡幅工事に伴う発掘調査

遺構（中世）：曲輪、堀切、土塁、道路状遺構

遺物（中世）：国産陶器、土師器、白磁、青磁、青花



第 8 図 戸崎城跡縄張り図

紙屋城

所在地：小林市野尻町紙屋字城原 640 番 34

発掘調査歴：1990『新村遺跡・高山遺跡、東城原第1・2・3遺跡、紙屋城址遺跡』

野尻町文化財調査報告書第4集 野尻町教育委員会

紙屋城縄張り図

紙屋城址は、紙屋新町から約3km東南の方向にある。秋社川とその支流が合流する舌状台地が南北に延び、北側以外は険峻な崖に挟まれた要害の地に築城され、県内でも希に見るS字型の連郭式山城であった。

五つの曲輪と10層からなる堀から成り立っていた。北側から1～3段目の堀は東西の谷を結び人工的に造られたものであるが、それ以外は天然の地形を利用して最小限の普請で造られている。北側5段目と6段目の堀の間に鐘撞堂が存在し、6段目と7段目の堀の間にあった4番目の曲輪が主郭と考えられる。築城者は紙屋氏であるという。

天正5年(1577)12月7日、伊東家家臣の福永丹波守祐友が島津氏に寝返ると、その縁戚であった紙屋城主の米良越後守主税助重方も、これに呼応したため、その翌日、紙屋城も島津氏の城に帰した。

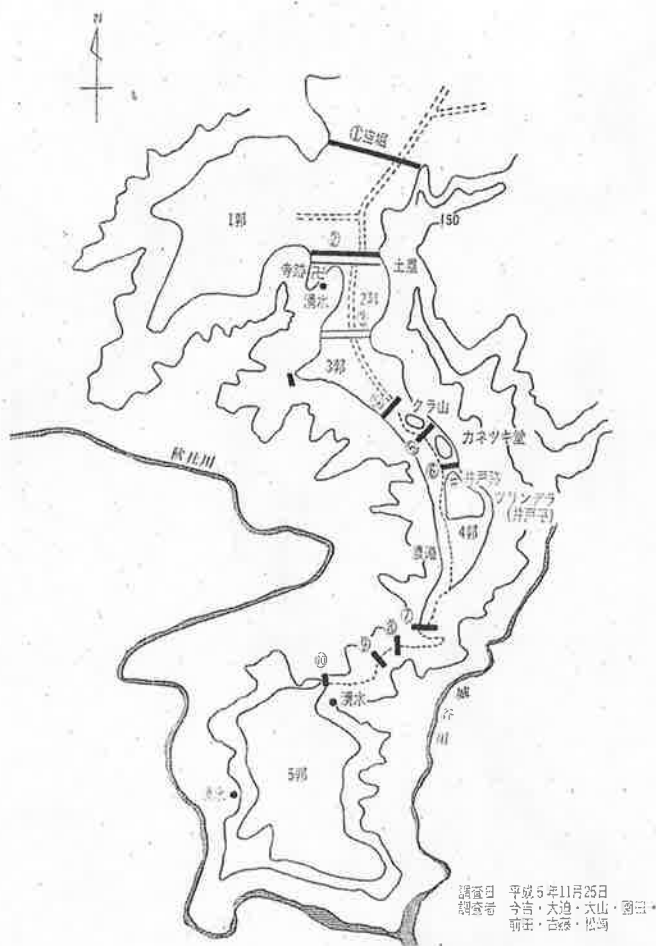
元和元年(1615)江戸幕府の一国一城令によって廃城となった。

【発掘調査概要】

原因：県営圃場整備事業に伴う発掘調査

遺構(中世)：空堀、土塁、掘立柱建物14棟

遺物(中世)：国産陶器、土師器、白磁、青磁、青花



- ①飯野城大手門跡
- ⑥木崎原古戰場跡
- ②加久藤城址

